

## 2 1 拒否された代替作 ルーブル版《岩窟の聖母》

2 0 1 9

真鍋友範

誰もが思い浮かぶ疑問。それは二枚の《岩窟の聖母》が存在する理由だ。

歴史上の事実として、レオナルドの弟子アンブロジーオは1503年にルイ12世への第二次訴訟を起こした。この訴訟時に、レオナルド側へ配慮することを指示するルイ12世からミラノ司令官にあてた書簡が、唯一のルイ12世の対応証拠として残っているようだ。

しかし、まだ疑問が残るのだ。

【ルイ12世は、この訴えに対し、ミラノの司令官に書簡を送る程度の第三者的な浅い関わりしか持たなかったのだろうか、】と。

当時は既にレオナルドの名声がヨーロッパに広く知れ渡っていた。フランス王ルイ12世のレオナルド作品への獲得志向は、当然強かった筈なのだ。

仮に【仲裁を要望されていたルイ12世が、消極的な対応ではなく、積極的に問題解決に動いた】のなら、【その行動を後押しする内面的動機とはいったい何だろう。】

ここで謎を解く【仮説】を提起したい。

それは、【ルイ12世が、係争解決をオモテの理由として、国王の資金でもう一枚の同じ絵画をレオナルド工房に代替作として制作させた、】という仮説だ。

このルイ12世の仲介は、国王の戦略的なウラ動機があれば強く推進される。【代替作が信心会に受け入れられたなら、その代わりに不要となるオリジナルのレオナルド作品を難なく譲り受けることが可能となるのだ。】

つまり、ルイ12世には、代替作へ投じた資金が無駄にならない上に、レオナルドの真筆を入手できるという絶好の機会となるのだ。

しかし、当時のレオナルドは描き直しそのものには同意していなかった。しかも1499年のフランス軍のミラノ侵略時にレオナルドはミラノを離れていたのだ。

残っていたのは、レオナルドの描いた紛争中の作品、レオナルド工房のアン

ブロージオやその他の弟子である画家達だった。

つまり、【ルイ 12 世は、レオナルドの弟子に対して代替作を注文できたのだ。】

この代替作は、弟子が描いたものであり、師匠レオナルドの作品より表現技量の劣る作品ということになる。

デッサンや光の表現などを両作品で比較検討すると、【代替作に該当するのは、明らかにルーブル版】なのだ。【ルーブル版はレオナルドが描いていない】のだ。

誰もが一見してすぐに気付くのだが、2 作品は全く作品から受けるイメージが異なる。同じ画家が描いてこれほど作品のイメージが異なるのは妙なのだ。

その根拠をひとつ挙げよう。

バロック画家カラヴァッジョが描いた二枚の作品《メデューサ》を見比べたい。これら二枚の作品の描かれた経緯は解っているがここでは省略する。



《メデューサ》(部分) 1596-97

カラヴァッジョ 個人所有

《メデューサ》 1598-99

カラヴァッジョ ウフィツィー美術館

上記 2 作品を比べてほしい。

ここから解る点は、一人の画家が、同時期に同じ題材の二枚の作品を描いた場合、その両方に画家の表現上の【共通した個性】が表れる。同じ画家であるなら【相互が大きく異なる表現になることは無いという事実】だ。

つまり、《岩窟の聖母》があれほどに表現上のイメージが違っている理由は、【作者が異なる】からなのだ。しかも、【弟子が描いた作品は、出来の悪い方のルーブル版しかありえない】のだ。

仮に、ルーブル版をダ・ヴィンチ作と判断する人には、レオナルド自身がルーブル版を描いたのだが、1806年のルーブル版の板絵からキャンバスへの支持体変更時にレオナルドのオリジナル作品が台無しにされた、と反論する余地があるのかもしれない。

例えば、2012年スペイン北部の地方聖堂の柱に描かれたイエスを素人信者が補修してサルのような顔にして台無しにしたボルハ事件を思い出すかもしれない。



《この人を見よ》

\* 左側は原画1910 \* 右側は修復後2012

しかし、19世紀初頭パリでの《岩窟の聖母》のタブローからキャンバスへの支持材補修時には、作品はルーブル美術館にあったのだから、当然、複数の美術館関係者が同時に関わっていた筈だ。つまりオリジナリティを大幅に損なうような改作などできなかつたと考えられるのだ。

結論として、ルーブル版において絵画修復家フランス人神父アクインによる【多少オリジナル性を損なう補修があっても、補修による大きい破損＝外観を替えるような内容変更はない】ということなのだ。

才能のある弟子なら、師匠を超える表現が可能だ。しかし、当時のレオナルドの弟子達は、ジョルジョーネの弟子ティツィアーノ程に有能ではなかつた。

弟子アンブロジーオはレオナルドから教えられた師匠の技法は広く習得していた。

しかし、師匠レオナルドがロンドン版で実践した【岩窟内に強い光が差し込む情景】、つまり原初的な《明暗法》の表現を再表現する技術までは習得していなかつたのだ。既に師匠レオナルドの表現は、ロンドン版において原初的な《明暗法》という一歩先の実験段階にあったのだ。

弟子は、師匠の初期の特徴である絵画全体に細密に自然を描き込む技法や、

師匠が編み出した sfumato を再現する技術については双方共に取得していたが、《明暗法》までは習得できていなかった。

つまりこの事実認識が重要なのだ。

2019年現在ではまだ双方ともにレオナルドの真筆という認識が一般的だ。しかし、ルーブル版がロンドン版より先に描かれたと考えるグループは、レオナルド初期の特徴に注目するが、より後の時期を示す sfumato 技法の存在という矛盾には反論できない。

逆にルーブル版がロンドン版より後に描かれたと考えるグループは、レオナルド初期の特徴よりも中期の sfumato 技法に注目するが、初期の特徴があることから、矛盾が生じる。

しかし、【この両者のもつ矛盾は、ルーブル版がレオナルドではなく、弟子によって描かれたという判断なら、矛盾無く説明可能なのだ。】

つまり、【弟子は一枚の絵画に、師匠レオナルドの初期の特徴と盛期の特徴を同時に描き込む事が可能】だからだ。

この理由により、【一見先に描かれたと見て取れるルーブル版が、ロンドン版より後に描かれていても矛盾しない】のだ。

弟子達が《ルーブル版》として《ロンドン版》を模写した時、師匠の描いたロンドン版にある《明暗法》による表現では、陰に隠れて見えていなかった【天使の右足先部分】を、弟子達は細密に描き出そうとした。

デッサン上ではありえない場所にそれは描かれている。解剖までして人体構造を学んだレオナルドに、こんな初歩的デッサンの誤りは有り得ないのだ。

また、師匠の行った最新の実験技法《明暗法》を弟子は習得できていなかった為、ルーブル版は、ルネサンス絵画に共通する《淡い全体に行き渡る光》で再現されたのだ。

一般的なイメージに反して、より近代的に見えるロンドン版《岩窟の聖母》は、一見古そうに見えるルーブル版《岩窟の聖母》より、実は先に描かれた作品だったのだ。

さらに、【代替作ルーブル版】は【失敗した代替作】でもあった。

なぜなら、《ルーブル版》はレオナルドからも聖母無原罪御宿り信心会からも拒否されたに違いないからだ。

その理由を明かそう。

記録は残っていないが、当時のレオナルド工房の弟子は、当然ルイ 12 世からの注文で《ルーブル版》を描く許可をレオナルドからもらっていた筈だ。しかし完成作を見たなら、レオナルドは失望したに違いない。

《レオナルドの当初意図した旧約聖書外典のエジプトからの逃避シーン》は、恐らくルイ 12 世の指示で、《洗礼者ヨハネのいる新約聖書の洗礼シーン》に改作されていた。

改作されたことにより、レオナルドの意図した《聖母からイエスへの【庇護】を示す左手の先の幼児イエス》と、天使に指差す方向の幼児イエスの計二人のイエスがいるという結果になり、レオナルドには容認し難い画面になるのだ。

レオナルドは、人の内面は、図像が無くても、身体表現で表現できると考えていた。（レオナルド手稿：『良い画家とは人の外面と内面を描ける画家』

つまり、《岩窟の聖母》で【聖母の庇護の手】の先に居るのは、当然幼児イエスなのだ。



《聖アンナと聖母子》 1424-25 ウフィツィー

マザッチョ／マゾリーノ

この根拠は、上記作品で説明可能だ。フィレンツェの画家マザッチョとマゾリーノが共同制作した《聖アンナと聖母子》を見よう。【聖アンナは、その庇護の左手を、聖母の膝の上の、少し離れた位置の幼児イエスに向けてかざしてい

る。】

レオナルドの尊敬するフィレンツェの先人画家の表現に既に先例が存在しているのだ。

レオナルドにとって、【庇護の手の先に存在するのは幼児イエスなのだ。】

従って、《岩窟の聖母》での【聖母の庇護を示す手の先にいるのが幼児イエス】という一体表現は、フィレンツェの先人画家マザッチョ作品の伝統に則り、レオナルドには譲れない表現であり、図像に近い性質の意味を持つ身体表現であったのだ。

レオナルドから見れば、ルイ 12 世の指示で【ルーブル版の天使に指差す手が描かれた】ことで、幼児イエスの位置と幼児の洗礼者ヨセフの位置が入れ替わったというより、幼児イエスが二人になったと感じた筈だ。

従って、レオナルドは、ルイ 12 世の指示で洗礼シーンに変更されたあげく、幼児イエスが 2 名になってしまうルーブル版を、レオナルド名の代替作として信心会に提示することなどできなかつたものと推測できるのだ。

更に、もう一方の聖母無原罪御宿り信心会にも受け入れは不可な作品なのだ。その理由は明瞭だ。【新約聖書の洗礼シーンに聖母は不在】だからだ。

【聖母無原罪御宿り信心会は、礼拝堂の祭壇に信心会の主張する無原罪の聖母を描いてもらいたかつた。その《当時最新の無原罪の聖母という信仰概念》を信者に伝えたかつたのだ。】従って【聖母が登場しない洗礼のシーンは、信心会には礼拝堂の祭壇画としては絶対に容認できないのだ。】

結論として、両者に拒否される運命の《ルーブル版》は、関係者に受け入れられない、【拒否された代替作】であつたのだ。

その後、レオナルドは、1506年の裁判で【未完成の判定を受けたロンдон版】への対処として、従来から一切の描き直しを断固拒否する立場であつたものの、周囲パネルへの代金支払いを受け取れず困っている弟子アンブロジーオへの配慮から、弟子アンブロジーオに《聖人たちを示す光輪》を加筆依頼し、係争を終わらせたのだつた。

以上まとめると、【ルーブル版は、仲裁を依頼されたルイ 12 世の注文で、レ

オナルドの弟子達によって描かれたもの。しかし双方から受け入れられない代替作であった】、という【仮説】こそ、現段階における二つの《岩窟の聖母》出現理由として最も矛盾ない説明と考えられるのだ。

裏付ける資料が未発見であることは残念だ。

~~~~~

余談だが、レオナルドが甦ってナショナル・ギャラリーのロンドン版《岩窟の聖母》を見たら、きっと驚き嘆くに違いない。

なぜなら、17世紀になって、画面左側に描かれた旧約聖書外典の預言者ダヴィデまたはイザヤは、十字の杖と革衣がロンドン版に描き加えられたことにより、新約聖書の洗礼者ヨハネに改変されているのだ。

ロンドン版におけるこの17世紀の洗礼シーンへの改変を一般信者の立場から見ると、幼児イエスの方が幼児の洗礼者ヨハネに祝福を与えるという、幼児の役割が逆の【奇妙な洗礼シーン】と見て取れ、新約聖書の洗礼シーンの記述と矛盾するのだ。これでは信徒が困惑したに違いない。

レオナルドから見れば、現在のルーブル版・ロンドン版は、双方共にレオナルドの当初の場面設定と人物配置を破壊した受け入れ難い問題作なのだ。